(6)　□八月□□〔通〕六人□　091(14)

(7)　「義□　091(17)

(8)　部門　091(17)

(9)　出雲〔豊嶋カ〕□□　(99)×(32)×(1)　081(21)

(10)　正六位□行大掾□　091(22)

(11)　「横作郷米□　(110)×23×3　019(26)

(12)　□〔鋳カ〕銭□　091(28)

(6)は、削屑二点が間をおいて続くものとしていたが、直接接続することが判明し、釈文そのものも訂正した。(7)(8)は、削屑二点が間をおいて続くものとしていたが、配列順が確定できないので、別のものとする。ただし、同一木簡の削屑である。また、釈文も訂正した。そのほかはすべて、釈文の訂正のみである。

9　関係文献

紫香楽宮跡調査委員会『宮町遺跡出土木簡概報』一（一九九九年）

（1～7・9　鈴木良章、8　鷺森浩幸）

滋賀・小谷城跡（伝知善院跡）

1　所在地　滋賀県東浅井郡湖北町大字郡上他

2　調査期間　一九九七年度調査　一九九七年（平9）九月～一九九八年三月

3　発掘機関　湖北町教育委員会

4　調査担当者　山崎清和

5　遺跡の種類　城跡

6　遺跡の年代　一六世紀初期～中期

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

小谷城跡は、戦国大名浅井氏三代の居城の跡として知られる。一九三七年に金吾丸から本丸を経て、中の丸、京極丸、山王丸、さらに大嶽（小谷山山頂）に続く山稜及び、清水谷をはさんだ西方の尾根上の山崎丸、福寿丸などの山城部分が史跡に指定された。一九九五年二月には本丸が所在する尾根と山崎

（長　浜）

丸、福寿丸のある尾根にはさまれた清水谷（きよみずだに）が追加指定された。

清水谷は、「小谷城跡絵図」（小谷城址保勝会所蔵、湖北町所蔵など）などによれば、重要な小谷城関連施設があった場所で、谷の最奥部に浅井氏歴代の居館であった「御屋舗」があり、これより谷の入口に向かって「木村屋敷」「山城屋敷」「大学ヤシキ」「遠藤屋敷」などの地名が伝えられている。また、清水谷の入口には「知善院」、中ほどに「天徳寺」、谷奥には「徳勝寺」「観音寺」という寺院の地名が伝えられている。知善院、徳勝寺は小谷城落城の後、羽柴秀吉によって長浜に移され現在に至っている。さらに、絵図には「此内不残屋敷跡」とも記されている。

このように清水谷は、山上の小谷城に対して城下の居館に相当する部分であり、浅井氏や重臣の屋敷、寺院などから形成される浅井氏家臣の日常の生活の場であったと考えられる。また、清水谷の入口を境に、南側の平地には城下町が形成されていた。

一九九五年度より、史跡小谷城跡清水谷地区の史跡整備を行なうため発掘調査を行なっているが、一九九八年度には、清水谷の入口に位置する「伝知善院跡」の調査を行なった。

「知善院」と呼ばれる区画は面積一六二六㎡で、現在確認できないが、以前は高さ約一mほどの土塁によって囲まれていた。調査はこのうち清水谷の入口で堀跡に接する八〇〇㎡の範囲で行なった。

調査の結果、地表から四〇cm～六〇cmの深さで、建物・土塁・溝、庭園と考えられる池の遺構が確認された。

庭園と考えられる池の遺構は大小の石を組み合わせたもので、長さ約一〇m幅約四m、残存する深さ約三〇cmである。この遺構から、陶器・土師質土器・鉄砲の弾・鎧の小札・塔婆・笹塔婆・柿経が出土した。

笹塔婆・柿経は庭園の池に投げ入れたように散乱して出土した。また、建物跡付近からは、金銅製の小椀が出土した。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□為正（梵字）讀禅定（元亀三年）　七月×　(99)×31×0.5　061

(2)　×属七世父母法界×　×亀三年　七月十×日［四］　(95)×32×0.5　061

(3)　□能於後世受持是経者我遣在人中行於如来事」　(282)×26×0.5　061

(4)　□於［若カ］一劫中常懐不善心作色而罵佛獲无量重罪」　(276)×26×0.5　061

(5)　□有讀誦持是法華経者須臾加悪言其罪復過彼」　(283)×25×0.5　061

(6)　×□求［人カ］佛道而於一劫中合掌在我前以无数偈讃」　(283)×25×0.5　061

(7) ×讃佛故得无量功徳歎美持経者其福復過彼」 (276)×25×0.5 061

(8) □[八カ]十億劫以最妙聲及與香味觸供養持経者」 (282)×26×0.5 061

(9) ×□[是カ]供養已若得須臾聞則應自欣慶我今獲大利」 (222)×25×0.5 061

(10) ×□[今カ]告汝我所説諸経而於此経中法華最第一」 (240)×25×0.5 061

(11) ×□[時カ]佛復告薬王菩薩摩訶薩× (158)×27×0.5 061

(12) ×□[量カ]千萬億已説今説當説而於其中此法」 (247)×26×0.5 061

(13) ×経最為難信難解薬王此経是諸佛秘要」 (255)×26×0.5 061

(14) ×□[蔵カ]不可分布妄授與人諸佛世尊之所守」 (245)×26×0.5 061

(15) ×昔已来未曽顕説而此経者如来現在」 (243)×24×0.5 061

(1)(2)の二点は、同一地点から柿経と重なって出土した笹塔婆である。元亀三年（一五七二）は、姉川の合戦の翌々年にあたり、陰暦七月一四日は盂蘭盆で、織田信長と対陣するなか、小谷城内でこのような法要を行なっていることは興味深い。

(3)以下の柿経は、保存状態の良好なもので幅二三㎜長さ二八一㎜、厚さ〇・五㎜で法華経が墨で書かれている。出土総数一一四点である。ここにあげたのはその一部、巻第四中の「法師品第十」を書写したものである。

（山崎清和）

(1)

(2)